

# 班女

世阿弥作

前

狂言 宿の長

シテ 花子

後

ワキ 吉田少将

トモ 従者

シテ 前に同じ

地は 前は美濃 後は京都

季は 秋

狂言

「かやうに候ふ者は。美濃の国野上の宿の長にて候。

さても我花子と申す上臈を持ち参らせて候ふが。

過ぎにし春の頃都より。吉田の少将とやらん申す

人の。東へ御下り候ふが。此宿に御とまり候ひて。

かの花子と深き御契の候ひけるが。扇をとりかへ

て御下り候ひしより。花子扇に詠め入り。閨より

外にいづる事なく候ふほどに。かの人を呼びいだ

し追ひいださばやと思ひ候。いかに花子。今日よ

りしてこれには叶ひ候ふまじ。とくく何方へも

御いで候へ。

シテ

「げにやもとよりも定めなき世といひながら。うき

ふししげき河竹の。流れの身こそ悲しけれ。

下歌地

「わけ迷ふ。ゆくへも知らでぬれ衣。

上歌

「野上の里を立ちいでく。近江路なれど憂き

人に。別れしよりの袖の露。そのまゝ消えぬ身ぞ

つらき。く。(中人)

「帰るぞ名残富士の嶺の。く。ゆきて都にかたらん。」

「是は吉田の少将とはわが事なり。さてもわれ過ぎにし春の頃東に下り。はや秋にもなり候へば。只今都に上り候。」

「都をば。霞と共に立ちいで。く。しばし程ふる秋風の。おと白河の関路より。また立ち帰る旅衣。浦山すぎて美野の国。野上の里に着きにけり。」

く。

「いかに誰かある。いそぐ間これは、や美濃の国野上の宿にて候。此所に花子といひし女に契りし事あり。いまだ此ところにあるか尋ねて来り候へ。」

「畏つて候。花子の事を尋ね申して候へば。長と不和なる事の候ひて。今は此ところには御入りなきよし申し候。」

「さては定めなき事ながら。もし其花子帰りきたる

事あらば。都へついでの時は申し上せ候へとかたく  
申しつけ候へ。急ぐ間ほどなく都に着きて候。わ  
れ宿願の子細あれば。是より直に糺へ参らうずる  
にて候。皆々参り候へ。

後ジテ一声

「春日野の雪間をわけて生ひいでくる。草のはつか  
に見えし君かも。

詞

「よしなき人に馴衣の。日を重ね月はゆけども。世  
を秋風のたよりならでは。ゆかりを知らする人も

なし。夕暮の雲の旗手に物を思ひ。うはの空にあ  
くがれいでゝ。身を徒になす事を。神や仏も憐み  
て。

カゝル

「思ふことをかなへ給へ。それ足柄箱根玉津島。貴  
船や三輪の明神は。夫婦男女のかたらひを。まも  
らんと誓ひおはします。此神々に祈誓せば。など  
か験のなかるべき。謹上再拝。恋ひすてふ。我名  
はまだき立ちにけり。

地 「人しれずこそ思ひそめしが。

シテ 「あら恨めしの人心や。

サシ 「げにや祈りつゝ。御手洗川に恋せじと。誰かいひ

けん空言や。されば人心。まことすくなき濁江の。

澄まで頼まば神とても。受け給はぬはことわりや。

とにもかくにも人しれぬ。思ひの露の。

下歌地 「置きどころ。いづくならまし身の行方。

上歌 「心だに。誠の道にかなひなば。く。いのらずと

ても。神や守らんわれらまで。真如の月はくもら

じを。知らでほどへし人心。衣の玉はありながら。

恨みありやともすれば。猶おなじ世と祈るなり。

く。

トモ詞

「いかに狂女。なにとて今日は狂はぬぞ面白うくる

ひ候へ。

シテ

「うたてやなあれ御覧ぜよ今までは。ゆるがぬ梢と

見えつれども。風のさそへば一葉もちるなり。た

ま／＼心すぐなるを。狂へと仰せある人々こそ。  
風狂じたる秋の葉の。心もともに乱恋の。あら悲  
しや狂へとな仰せありさむらひそよ。

トモ 「さて例の班女の扇は候。

シテ 「うつゝなや我名を班女と呼び給ふぞや。よし／＼  
それも憂き人の。形見の扇手にふれて。うちおき  
がたき袖の露。古事までも思ひぞいづる。

カル 「班女が閨の内には秋の扇の色。楚王の台の上には

夜の琴の声。

地 「夏はつる。扇と秋の白露と。いづれか先に起臥の。

床冷しや一人寝の。さびしき枕して。閨の月をな  
がめん。

クリ 「月重山にかくれぬれば。扇をあげてこれをたとへ。

シテ 「花琴上に散りぬれば。

地 「雪をあつめて春を惜しむ。

シテサシ 「夕べの嵐あしたの雲。いづれか思ひの妻ならぬ。

地「さびしき夜半の鐘の音。鶏籠の山に響きつゝ。明  
けなんとして別れを催し。

シテ「せめて閨もる月だにも。

地「しばし枕に残らずして。又ひとりねに為りぬるぞ  
や。

クセ「翠帳紅閨に。枕ならぶる床の上。なれし衾の夜す  
がらも。同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の。  
命のみをさりとともと。いつまで草の露のまも。比

翼連理のかたらひ。其驪山宮のさゝめごととも。誰  
か聞きつたへて。今の世まで漏らすらん。さるに  
ても我夫の。秋より先に必と。夕べの数は重なれ  
ど。あだし言葉の人心。頼めてこぬ夜は積れども。  
欄干に立ちつくして。そなたの空よとながむれば。  
夕暮の秋風。嵐山おろし野分も。あの松をこそは  
音づるれ。我待つ人よりの。音づれをいつ聞かま  
し。

シテ「せめてもの。形見の扇手にふれて。

地「風の便と思へども。夏もはや杉の窓の。秋風冷かに吹き落ちて。団雪の扇も雪なれば。名を聞くもすさましくて。秋風恨みあり。よしや思へば是もげに。あふは別れなるべし。其むくいなれば今さら。世をも人をも恨むまじ。只おもはれぬ身のほどを。思ひつゞけて独居の。班女が閨ぞさびしき。

地「絵にかける。(舞)

シテワカ「月をかくして懷に。もちたる扇。

地「とる袖も三重がさね。

シテ「其色衣の。

地「夫のかねこと。

シテ「かならずと夕暮の。月日もかさなり。

地「秋風は吹けども萩の葉の。

シテ「そよとの便も聞かで。

地「鹿の音虫の音も。かれぐの契。あらよしなや。



シテ「かたみの扇より。

地「かたみの扇より。猶裏表あるものは。人心なりけるぞや。扇とはそらごとや。逢はでぞ恋は添ふ物を。く。

ワキ詞「いかに誰かある。あの狂女が持ちたる扇見たきよし申し候へ。

トモ「いかに狂女。あの御輿の内より。狂女のもちたる扇御覧じたきとの御事にて候。まるらせられ候へ。

シテ「是は人のかたみなれば。身を離さでもちたる扇なれども。形身こそ今はあだなれ是なくは。忘るゝひまもあらまし物をと。思へどもさすがまた。そふ心地するをりくは。扇とる間も惜しきものを。人に見する事あらじ。

ロンギ地「こなたにも。忘れがたみの言の葉を。磐手の杜の下躑躅。色に出でずはそれぞとも。見てこそ知らめこの扇。

シテ「見てはさて。何の為めぞと夕暮の。月をいだせる  
扇の絵の。斯くばかり問ひ給ふは。なにの御為な  
るらん。

地「何ともよしや白露の。草の野上の旅寐せし。契の  
秋は如何ならん。

シテ「野上とは。野上とは東路の。末の松山波こえて。  
歸らざりし人やらん。

地「末の松山たつ波の。何か恨みん契りおく。

シテ「形身の扇そなたにも。

地「身にそへ持ちしこの扇。

シテ「輿のうちより。

地「とりいだせば。をりふし黄暮に。ほのぐ見れば  
夕顔の。花をかきたる扇なり。此上は惟光に。  
脂燭めして。ありつる扇。御覧ぜよたがひに。そ  
れぞと知られ白雪の。扇のつまのかたみこそ。妹  
背の中の情なれ。く。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第一輯』大和田建樹 著